

明治28年歯科医会編『歯牙保護論』の書誌学*

松本 実 田辺 明 栗山美子
森山徳長 石川達也**

要 旨

日本の歯科医師団体の発祥は、東京における明治26年11月の『歯科医会』に端を発する。この会は次第に発展し、ついには現在の日本歯科医師会となる母体となった。

本会が明治28年に、発行した小冊子『歯牙保護論』は、業権の確立と一般庶民への啓蒙を目的としている。明治初年に桐村、伊沢、高山らの先覚者が執筆した一連の歯科衛生啓蒙書のうち、歯科医師団体が発行した本書の書誌学と、歯科医会の志向していたところの詳細を本論文で解析した。

The first organization of dentists in Japan was inaugurated in June 1893 as "The Dentists' Association" in Tokyo and gradually grew up as the nation wide organization. Therefore it can be said that present Japanese Dental Association had stemmed from this organization.

A small booklet "The Protection of Teeth" was issued for the purpose of enlightening the dental hygiene for the general public and at the same time the propagation of Dental Society from this Dentists' Association in November 1895.

* Studies on the Bibliography of "The Protection of Teeth" published by the Dentists' Association in 1895

** Minoru MATSUMOTO, Akira TANABE, Yoshiko KURIYAMA, Norinaga MORIYAMA and Tatsuya ISHIKAWA, Tokyo Dental College 東京歯科大学

本論文要旨は、第19回日本歯科医史学会総会・学術大会(1991年9月7日於大阪歯科大学)において松本が口演した。

The publication of a series of books on the dental hygiene by the pioneers of early Meiji-era were already done by Drs. Kirimura, Izawa and Takayama.

The peculiarity of this booklet which was issued specifically by the Dentists' Association was described somewhat in detail bibliographically, and the purpose and background of this publication was also explained in this article.

(キーワード Key words)

歯科医会 Dentists' Association, 歯牙保護論 The Protection of Teeth, 書誌学 Bibliography

I は し が き

明治12年桐村克己が初めて翻訳の歯科衛生の啓蒙書を出版して以来、伊沢道盛、またとくに高山紀斎ほかに依り、大衆向きの平易な衛生指導書が次々と出版された。

筆者の一人森山は、1991年3月本学会第210回例会で、明治初～中期発行口腔衛生啓蒙書の比較書誌論を発表した¹⁾。その中で、本論文で取上げる『歯牙保護論』について簡単にふれたが、本書は団体で発行された点が特異な文献である特徴をもつことを述べた。

わが国最初の歯科医師の団体として明治26年6月14日に東京在住歯科医を主として結成し、発会式をあげた『歯科医会』は、その後発展して現在の日本歯科医師会の母体となった。明治28年に同会は、会員が患者にチェアサイドで歯科衛生を説く手引書として本書を編纂した。この46頁(うち

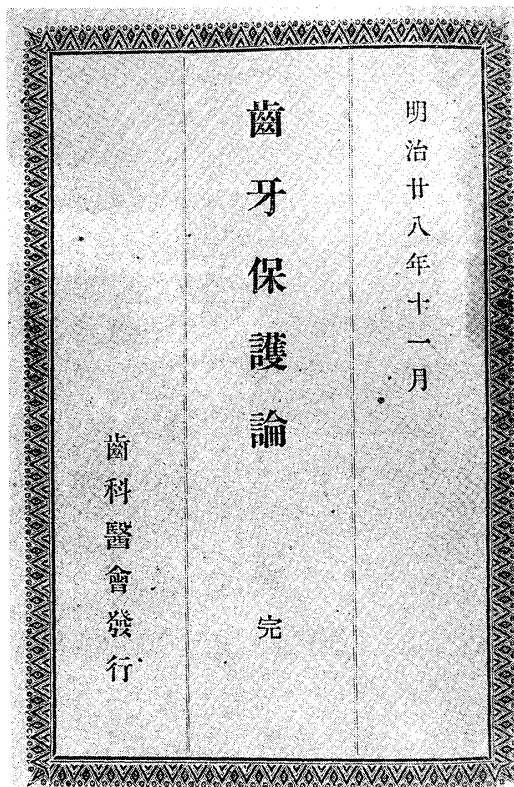


図1 本書の表紙兼表題

Fig. 1 The Cover and the Title of this Volume

本文31頁)の小冊子は、齒科医会の規約や役員・会員名簿を含んでいる^{2,3)}(図1)。

II 『歯牙保護論』の書誌学

1) 書誌的概略

菊版紙表紙洋装幀の本書は、縦書旧漢字平仮名交り文で書かれ、12行30字詰、術語や難解語には右側に読み左側に意味のルビを振ってある³⁾。

構成は、表紙兼扉—1, 緒言—2, 図—2, 本文—27, 齒科医会紹介記事—3, 規則—6, 名簿—7, 奥付—1 となっており、紹介記事以下は漢字片仮名交り文となっている。

2) 緒言

『歯堅則壽, 何ヲ以テ之ヲ謂フ歯牙ニシテ朽傷缺損センカ食物ノ咬断齧碎何ニ依テ之ヲ営マン唾液の効, 腸胃ノ力施コスニ由ナカラン……』という難解な書出しで、『歯が丈夫ならば長生きできるとはどういうことか? 歯がむし食ったり欠けていたらどうしてよく咬めようか。唾液や胃腸の働きも役に立たず、滋養の多い食物も不消化とな

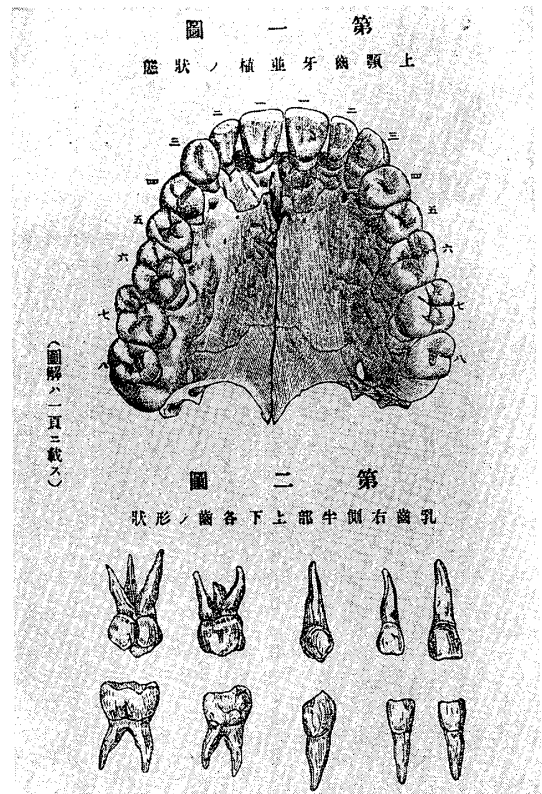


図2 第1図上顎骨に永久歯が植立した状態
第2図右側上・下乳歯の形態

Fig. 2 Figure 1 The Plantation of Upper Permanent Teeth on the Maxilla.
Fig. 2 The Morphology of Right Upper and Lower Deciduous Teeth

り、長生きはできない。さらに談話器、装飾器としても大切に、デモステネスやクレオンの能弁や莊姜の美しさも、健全な歯牙により、長く詩に謳われるのである。このように人生の快樂や榮譽はすべて健全な歯牙によるといっても嘘ではない。保護をおろそかにしても良いものであろうか。…
…編者識』

と述べる。

3) 口 絵

第1図 上顎歯牙並植ノ状態, 第2図 右側乳歯上下各歯ノ形状, が第1頁にあり, その解説は本文1頁にある(図2)。第3図 上顎切歯縦断面, 第4図 上顎大臼歯縦断面(下顎の誤植)が第2頁で, 解説は2頁にある。

4) 本 文

目次はないが以下の見出しが文中に大活字で記載される。()内は頁数を示す。本書第1頁を図

歯牙保護論

齒牙の解剖及發生期

齒牙保護法を説くに先ち讀者は齒牙解剖の大意を知悉せざるべからず依て左に之を述べん

齒牙に二種類あり一を乳齒と云ひ一を永久齒と云ふ乳齒は小兒の齒牙にして永久齒發生の期に至れば脱落して之と交換す乳齒は其數上下各十枚にして永久齒は其數上下各十六枚とす第一圖は上顎永久齒の骨中に並植せる状態を示す(一)は中央前齒(二)は側前齒(三)は犬齒(四)は第一小臼齒(五)は第二小臼齒(六)は第一大臼齒(七)は第二大臼齒(八)は第三大臼齒即ち智齒なり第二圖は乳齒右側半部の形狀を示す即ち中央前齒側前齒犬齒及第一第二臼齒とす第三圖は上顎

齒牙の解剖及發生期

図 3 本文第 1 頁

Fig. 3 The First Page of the Text

3に示す。

- | | |
|---------------|------|
| 1 齒牙の解剖及發生期 | (1) |
| 2 齒牙掃除及飲食物の注意 | (4) |
| 3 齒磨粉 | (7) |
| 4 齒石及血石 | (9) |
| 5 齒牙交換期及乳齒保護 | (11) |
| 6 齲齒及消耗症 | (16) |
| 7 充填 | (21) |
| 8 義齒 | (23) |
| 9 湮齒(おはぐろのこと) | (25) |

以上の順序内容は、大凡伊沢の『固齡草』と、その後シリーズで発表された高山の著述に準じている。本書執筆者はある事情で明示されていないが、当時高山齒科医学院で齒科病理学等を講じていた青山松次郎である²⁾。第6項の記載などは、項目を立てて齒科病理学的に解説してあることでもそれが証明される。

III 齒科医会に関する記載

本文9項目の次に『本編ヲ終ルニ臨ミ特ニ讀者

ノ注意ヲ乞ハントスルモノハ齒科医ト入齒齒拔營業者トノ區別是ナリ……』という書出しで、『内外科医ト同ジク官府ノ試験ニ及第シタル學術的醫師』である齒科医と、『從來ノ入齒齒拔師が官庁鑑札ノ下に一時其業ヲ繼續セル技術的職工ニ過ザル……齒科医ト類似ノ標牌ヲ掲出シ又自ラ齒醫師ト唱フル者アリ』と區別を述べ、そのため世人が判別し難いので、齒科医会々員は図に示す門標を掲げると記載している。

齒科医会規則と名簿については、齒科醫師發祥の時代のことで興味はつきないが、成書とくに高木圭二郎の筆に成る東京都齒科醫師会70年史²⁾に詳しいのでここでは省略する。

本書の奥付には、著作兼發行者齒科医会、右代表者下川確矣、印刷者仁科衛、印刷所厚信舎とある。

IV 本書發行の経緯

齒科医会は明治26年6月16日、大日本私立衛生会で発会式を行ったがその後順当に発展し、28年春期常議員会で本書發行の事が決議され、幹事青山に執筆が依頼された。9月脱稿、印刷に付する際に幹事富安晋との間に確執が生じ、最終的には齒科医会と書記下川の名で出版されたといういきさつがある。

これも東京都齒科醫師会70年史に詳しい。

この時代は、正規の免許を取得した齒科醫師がようやく全国で300名に達しようとしていたが、なお市中では齒拔・入齒療治者や香具師などによる姑息な治療が数の上では優位な状態であった。それで、正式な洋方齒科醫師の業權拡張のためには、齒科医会のような団体の結束が不可欠であった。さらに団体としての大衆に対する宣伝の必要が痛感されて、本書の編纂が企画され、実現したものと考えられる。

一方正規の齒科医育機関は、明治22年東京齒科專門医学校が設立されたが、翌年には廃校となってしまった。本書發行の時点では、明治23年開校の高山齒科医学院、明治27年の愛知齒科医学校しかなかった。そこで著者として、高山齒科医学院齒科病理学講師青山松次郎に白羽の矢が立ったの

である。

V む す び

洋方歯科医の数が漸増し，歯科医団体が結成されて2年，社会一般大衆の啓蒙は大切な事業の一つであった。

簡潔ではあるが内容がしっかりしており，また『歯科医会』そのもののPRをかねた本書の書誌的内容とその意味するところを概説した。

参考文献

- 1) 森山徳長：明治初～中期発行口腔衛生啓蒙書の比較書誌論(その1). 日本歯科医史学会々誌 18(1): 1-4, 平成3年10月
- 2) 山田平太・今田見信・高木圭二郎：東京都歯科医師会70年史. 社団法人東京都歯科医師会, 昭和43年3月31日, 18-55頁
- 3) 歯科医会編(青山松次郎)：歯牙保護論. 歯科医会, 明治28年11月

著者への連絡先：〒112 文京区白山5-3-12

森山徳長 03-3812-2950